

An abstract painting featuring bold, expressive brushstrokes in red and blue on a light background. The red strokes are thick and dynamic, while the blue strokes are more fluid and layered. The composition is energetic and non-representational.

岡本かの子全集

第五卷



岡本かの子全集

第五卷

冬樹社

T  
A  
R  
O

# TARO

岡本かの子全集 第五卷  
昭和四九年十二月一〇日初版第一刷発行

著 者 岡本かの子

發行者 高橋直良

發行所 冬樹社

東京都千代田區神田神保町二一八

電話東京二六四—〇三四六

振替東京七七五七

印刷所 株式會社太洋社

製本所 有限會社三和製本所

製函所 株式會社光陽紙器製作所

本文用紙抄造 王子製紙春日井工場

表紙用クロス 日本クロス株式會社

裝 畫 岡本太郎

裝 幀 栃折久美子

第五卷 目次

|           |    |
|-----------|----|
| 褐色の求道     | 三  |
| 越年        | 一四 |
| とと屋禪譚     | 三〇 |
| ある時代の青年作家 | 四〇 |
| 雛妓        | 五九 |
| 眞夏の幻覺     | 一〇 |
| 噴水物語      | 一三 |
| かの女の朝     | 一六 |
| 或る日の幻想    | 二六 |

|        |    |
|--------|----|
| 寶永噴火   | 一五 |
| 富士     | 一六 |
| 窓      | 二四 |
| 旅宿より夫へ | 二五 |
| 食魔     | 二六 |
| 美少年    | 二七 |
| 解題・校訂  | 三五 |

小

説

5



## 褐色の求道

獨逸に在る唯一の佛教の寺だといふ佛陀寺<sup>ブツダウジ</sup>へ私は伯林遊學中三度訪ねた。一九三一年の事である。

寺は伯林から汽車で一時間ほどで行けるフロウナウといふ町に在った。噂ほどにもない小さな建物で、町外れの人家の中に在った。流石に其處だけは自然に土盛りが高くなつてゐて、多少の景勝の地は占めてゐる。その隆起の峯續きを利用して寺の主堂、廊、翼堂と建て互したのであつた。門は直ぐ道路のペーヴメントに沿うて建てられてあつたから、この入口から寺の玄關まで、およそ愛宕山の三分の一ほどの登り坂になるわけである。

大げさに言へば此處の宗祖——とも言ふべき寺のあるじのダルケ氏は、もう歿して居ないのである。あとを預つて居るダルケ氏の妹で中年の普通の獨逸女が案内して廻つて著書などを賣る。その管理の女に様子を訊いたり、買った著書を少し繰つて見たりしたけれども、此の寺の創立者に到底本筋の佛教の知識や心驗が

あつたやうには思はれない。例の印度から直接獨逸に取入れられた原始經典にいささか觸れるところがあり、それに西洋人得意の獨斷を交へて自己満足の宗教を考へ溜めたものらしい。もつともこの宗祖には師匠に當るやはり獨逸人の老人がゐたのだが、大に嘯まれたのが元で死んでしまつたといふ話を聽かされた。宗祖には他に弟子も無いのだからダルケの宗門は斷絶し、今はこの寺だけが遺身かたみにのこつてゐるわけである。少し離れて建つてゐる齋戒沐浴のため使つたといふ浴室のまはりに木の葉が佗しく掃き積つてゐた。

宗祖が東洋の事にあまり明るくなかつた證據は寺の建物の趣きにも知られる。それは印度風でもなし、支那風でもなし、人によつては回教の寺とも思はしめるほど、およそ東洋の寺院とは縁遠い様式である。數寄の者の建てたエキゾチックな別莊ソツ——一口に斯う言つてしまつた方が早いやうである。従つて中にある什具も國籍不明のちぐはぐなもので、數も少ない。たゞ本堂と覺しき多角形の廣間の、ひと側の中央に漢字で彫つた法句經の石碑が床の上に屹立して禮拜の標的を示してゐる。この部屋は、光線の取り方も苦心をして幽邃を漂はせてゐるから、此處こそ參詣者の類づく場所と、私も合點して合掌したのであつた。

そんなわけで私は失望しながら、日本人の名前の澤山書いてある參詣者記念名簿に私も義務だけにペンで名前を書入れて歸つた。

寺は氣に入らなかつた。然し町は氣に入つた。名も無いフロウナウの町は平凡そのものゝやうであつた。几帳面に道路に仕切られ、それに思ひ／＼の住宅が構へられてゐた。伯林から一時間で通へる道程なのだから、住民の多くは伯林に職を持つ中小の勤人であらう。

恐らく伯林市から離れて近郊に住宅を持つ勤人の遠距離の住宅地の一つなのであらう。それ故に田舎町に

しては小ざつぱりとして閑かであつた。たとへ道を訊くためにドアのベルを鳴らしても出て来る家族は、不愛想な顔もせず、表まで出て来て念入りに教へて呉れる餘裕を家々は持つて居た。また、私は、汗水を垂らして工面した少しの建築費で如何に素人ながらも個人の趣味性を満足させようかと、心を籠めて建てた勤人の家屋の設計を見て廻るのも興味があつた。私は最早や異境滯遊三年に近く、所謂偉大なもの、壯麗なもの——つまり異常なものゝ見物には刺激されなくなつてゐた。つましい平凡に饑ゑてゐた。それ等の理由で、思はず私は二度目の足を此の町に運んだのであつた。春も近くなつたのでリンデンやブラタナスの街路樹の梢が色づいて來てゐた。それを越して眺められる町の屋根から空も、寒さに張り詰めた息をすこし洩す緩やかな光が添つた。だが冬の續きの白雲はまだ青空に流水の險しさを見せて、層々北から南へ間斷なく移つて行つた。雲によつて陽が翳るごとに路面に遊んでゐる乳母車、乳母、子供、犬が路面ごと灰色の澁晦を浴せられた。

來た以上、素通りもと、私は二度目の佛陀寺へ寄つた。そして見物はもう不要だから、例の本堂の法句經の碑の前に、たゞ合掌して歸るつもりであつた。その碑の前には一人の質素な服裝の獨逸人の青年が、膝まづいて兩手を確かり組み合せ、それを胸の前で頻りに振り廻してゐた。眼は瞑つてゐた。

私はこの青年の禮拜の仕様があまりに不器用なので眞面目なのか、冗談なのか見境がつかかなかつた。けれども、そんなことはどうでもいいのだから、兎に角その青年を妨げぬやう、すこし離れて石碑へは斜に、私の禮拜の時の癖になつてゐる未敷蓮華と、それから開敷蓮華の道印を兩手で結んで立ちながら、丁寧に頭を下げた。

私の素振りを横眼でちらりと見たやうだつた青年は、急に手を解き捨て膝を立てゝしまった。その様子が、如何にも極りの悪いことをしてゐたのを早く止めたといふ風で氣の毒に思へた。その青年はやゝ顔を赧らめさへして私の立去り際を押へて口籠つて言つた。

「佛教では、掌の合せ方は、いま、あなたのなさつたやうにするのですか。大變難かしいですね。恐れ入りますが教へて下さいませんか。どうぞ、どうぞ」

私はその求め方があまり唐突なので笑つてしまつた。それから「失禮しました」と斷つて笑ひを收め

「いえ、別段、難かしいことはないのです。禮拜は心を統一さす爲めの形式方法なのですから、めいゝ自分に都合のよい手の合せ方をすればいいのです。けれども普通はこれです。」

と言つて普通の十指の合せ方をしてみせた。

「ほんとに、これでいゝんですか」と自分も眞似ながら頻りに不安がつてゐる青年を私はどうやら會得させて、先へ室を出てしまつた。その青年は新らしく教へられた合掌の仕方では石碑に向つて禮拜をしなほして居た様子だつた。

町を歩き廻つて夕刻少し前、停車場へ戻つた。生憎と伯林行き汽車は出てしまつた後だつた。次の汽車までは一時間はある。停車場の軒續きに覗くと清潔さうなレストランがあるので、少し早いとは思つたが晚餐を済ますことにして其の店へ入つて行つた。

客は一人も居なかつた。年寄つたウェーターが私を出張りの硝子圍ひの側近くの卓に導いて呉れて、間もなく皿を運んで來た。私は程よく燃えてゐるストーヴに暖められながら、いつの間にか氷雨が降つてゐる硝

子の外の景色を眺めながら悠つくりフオークを動かしてゐた。停車場前の廣場に降る緩慢な氷雨を通して、町へ斜めに筋を通してゐる寂しい主街メインストリートに、うるみながら黄いろい灯がちりりほりり點いて行く。私は日本の東北の或る寒驛に汽車を待侘びてゐる旅人のやうな氣がして故國との距離感を暫く忘れたほど東洋的な閑寂な氣分に引入れた。その間、二三度伯林から汽車が着いて此の町の住宅へどや／＼と歸つて行く勤人の群集ギャングスが眼の前の廣場を遮り通るのもあまり氣にならなかつた。私はまた、日本の田舎の町辻にある漣掛けをかけた石の地藏とか、柳の落葉をかぶつてゐる馬頭觀音とかいふものゝ姿が、直ぐ其處らにでも見當るやうな親しさで、胸に思ひ出して居た。

硝子窓の外で、ざらりと光つた數珠の玉が眼に映つたのと同時に、この出張りの天井の電燈もついた。光つた數珠の玉は連翹の撓つた小枝に溜つた氷雨か雫であつた。そこに一臺の自轉車が錆びたハンドルだけ見せてゐた。

デザートを運んで來た給仕を何氣なく見て私は驚いた。それは、さつき佛陀寺で遭つた青年だつた。今は給仕の服にエプロンをかけてゐた。青年はすこしの間でも客の女性を不審の中に置くまいとする氣遣ひらしく、少しあわて氣味の早口で言つた。

「先刻は失禮しました。私は此處の給仕人を勤めてゐるものです。もつとも臨時雇ですが、——あなたにもつと佛教のことを伺ひ度いと思ひまして、あのおぢいさんの給仕人に番を代つて貰ひました。だいぶ遠慮して差控へてゐたのですが、どうしても好き機會と思ひましたので」

それから彼はマナーデヤの方を氣にしながら、私の食事をサーヴィスしてゐる形に見せつゝ、彼の訊き度いと思ふ仔細を語つた。

青年は名をベックリンと言つて伯林商業大學の生徒だつた。自活をしてゐるので、仕事のあるときは多く

その方を懸命に働き、學校は、言はゞ失業のときの暇つぶしですと言つた。

「御承知でもありませんが、いま獨逸で私たちのやうな境遇の者の食つて行く途は實に骨が折れるのです。こつちは何でもやるつもりですが仕事がありません。私たちの日課と言つたら朝起きて新聞の職業紹介欄を見て、目星しいものにサインを付け、それを一々自轉車に乗つて尋ね廻ることです。誰が先にその求人事務所に乗りつけるか、まるで自轉車競走です。そして一々すげなく斷られて歸つて來ます。そして朝飯のパンを喰ります。もう習慣になつてゐますから、求職の一廻りをして、それからでない朝飯が落着かないくらゐです。然し自轉車といふものを見ると實に何とも言へない此の世に嫌氣がさします。

冬中はまだいゝのです。伯林の市中で雪掻き人夫を使ひます。これは體さへ丈夫なものならどうにか割込めます。ですから私たちは朝、目を覺して窓硝子に粉雪の曇りが見えるとき寢床から飛上つて『占めた!』と叫びます。雪掻き仕事は、その日勘定の仕事ですから恆久的財源にはなりません、然し、ちよい／＼あるので、姉か叔母さんに駄賃を貰ふやうな氣がして樂しみな仕事です。道路で働いてゐると兩側の家の子供がまつはり付いて雪掻きを手傳つて呉れます。これもこの仕事を好ましいものに思はして呉れる一つの情趣です。

そんなわけで私たちに取つて春が来るくらゐ氣を減入らせるものはありません。春になると空や大地は詩的にも經濟的にも私たちには赤裸にされてしまつて餘韻のないものになつてしまふのです。その春がもう來ます。やつと私はこゝのレストランに一ヶ月程の臨時雇ひの仕事を見付けましたが、これももう一人の給仕人が病氣で休んでるからで、病人が癒ればお拂ひ箱です。

なにしろ、私は疲れました。もう此の世に刺激もパッションも無いのです。少しぐらゐさういふものゝあるのは却つて私に取つては苦痛です。全く無意識な世界、無意味な生涯、さういふものを却つて望ましく

なつて來たのです。私たちが生の自覺を持ち、意識や、意味に振り廻されて疲勞ばかり覺える一生といふものは、人間に取つてあまりたいしたものではありません。それよりも生の前、死の後の、あの混沌とした深い眠り、肉體も精神も完全に交渉を斷つたあの深い眠り、この方がどのくらゐ價值があることかわかりません。第一、時間から言つても、片一方は五六十年の間ですし片一方は無限の間です。どつちが人間としても本當の生涯か考へさせられます。

佛教で言ふニルヴァーナといふのはさういふことではないでせうか。

私は生きながら無刺激、無感覺の生活をしたいと、より／＼探つてみました。さういふところは、もう、あまり世界に多くありません。印度人のやつてゐる僧庵生活に就いて人から聴きました。膝を組んで全く死の狀態になつて暮してゐるさうです。私に取つて此のくらゐ耳寄りの話はありません。それで其處へ行く支度にかゝりました。

ところが驚きました。私のやうな考へを持つた同じ獨逸人がまだ澤山在ると見え、その目的で獨逸人が印度に入り込む者が段々多くなつたさうです。それで近頃イギリスの官憲が斯ういふ獨逸人を間諜ぢやないのかと疑ひ出し、我が國の外務省も氣兼ねをしながら、印度入りの旅券を下附してくれませんが、イギリスの領事館で上陸許可の査證を仲々くれません。

然し私は決心してゐるのです。裏の方から通つて行つても屹度印度へ入るつもりです。そこで私の生涯を葬ることに成功するつもりです」

私はベツクリン青年の語る言葉を聴くうちに、途中で二度も三度も「まあ、ちよつと、待つて」と叫びかけた。青年が「佛教、佛教」と口で言ひ、心に思ひ込んで居る考へは、決して佛教ではなかつた、否、却つて教主釋尊より彈呵を受ける資格のある空亡外道の思想であつた。

だが、私は、私に對して近頃珍らしい同信者と見て奔河の流れのやうに自己を語る青年の満足さを見ては、押しても彼の言葉を妨げることは出来なかつた。彼の言葉のスピードに私の言葉は弾ね飛ばされもしたのだつた。

私は此の地へ来るまでに倫敦の佛教協會員とか、その他の歐洲人で佛教に興味を持つといふ人々とかに出會ひ、如何に彼等が小乗趣味の嗜好者であり、滅多に大乘教理を受け付けさうもない素質的のものであるかを根本に感じ、今更ながら現實肯定の佛教が、その思想が高遠であるだけそれだけ西洋人の宗教概念とは相容れず、うっかりすれば單なる厭世教に取られさうな氣配ひさへ見ゆるのに危険を覺えて慎しみを持つやうになつて居た。西洋人に大乘教理を説くのは餘程の基礎知識の準備を與へて、さてそれから後のことだと思つたのであつた。

もう一つは私は教役者ではない。私は佛教の鳥だ。うたふのだ。たとそれだけでいい。若し萬一、私の如き者が佛教を筋道立てゝ講ずるのを必要とする場合が來たら、私は先づわが同胞に説かう。それが私に許されねばならぬ唯一の好みだ。それから先は兎にも角にもである。

それや、これやがあるので私は、挟み込めない私の言葉をそのまま無駄にして、終ひには寧ろ青年が快く話し得られるやうに仕向ける態度を取つた。青年は心置きなく語つたやうだ。停車場には伯林行きの汽車が着く頃になつたと見え、ちらほら乗客の姿が入口に溜つて見えた。青年は勘定書を持つて來るとき急いで言つた。

「たゞ一つ伺ひ度いのは愛の問題です。疲れた者にも愛だけは斷ち切れません。寧ろ精神肉體の中で他の部分が疲れて來るほど、愛慾の部分ははつきり目を覺して來るやうに思はれます。この始末を佛教ではどうするのでせう。私は斷ち切り度いのです。だがこれだけはどうすることも出来ません。若しも、それが出来る

呪文とか考へ方とかどあつたら教へて頂き度いのです。私は戀人を持つて居ます」

私はもう立上つて居た。斯ういふ人と、需めとに對しては容易に答へられるものではない。私はふとヘルマン・ヘッセのシツダールタといふ本を思ひ起した。私はこの本を倫敦にゐたとき英譯で讀んだのだが、その原著者は確かに獨逸人である。この本の主人公シツダールタは、釋尊のコースを直線とすれば、これに對して弧形を描き、受難求道して幾分か大乘佛義を窺ひ得た形跡がある。

求道の手法としては吠陀や波羅門神學に據るところが多いが、最後の到着は究竟の一味を持つてゐる。大乘理想から見れば、肝腎の菩提心の一着だけは缺いてゐるが、殊にこの著書の特徴は、人間の愛慾に求道を終始連絡させてゐるところである。この點基督教仕立ての西洋人の著書であり、また、西洋人に解脱を與へることも多からう。獨逸人をして獨逸人を治めしめよ。私は心に微笑を覺えて言つた。

「やつぱりあなたと同じ獨逸人の宗教小説家でヘルマン・ヘッセといふ人があります。この人の著書の『シツダールタ』を讀んでご覧なすつたら如何です。多少參考になるかも知れませんか」

青年は素直に注文聽取簿に私の言つたこと、著者と書名を書き記してゐた。私は汽車に乗り遅れてはと、急いで停車場へ駆けつけた。

私は責任をヘッセの著書に譲り渡し、それで氣が済んだつもりであたが、さうは行かなかつた。あれだけ虚無の魅力に牽付けられた疲れた人間が、なか／＼文學や説明や詩で蘇らせられようとは思へなかつた。そこで三度目のフロウナウ町行きとなつた。せめて青年のその後の様子だけでも見たいと思つたからである。停車場のレストーランへ行くと、青年は女の連れと一緒に佛陀寺へ行つたといふことだつたので、私も不必

要な佛陀寺へ三度目の参詣をした。

急に春めいて来て、町の街路樹はすっかり萌黄の芽を吹き、家々の窓や塙根から色々の花さへちらほら見えた。寒さからのがれた空はたるんで、暖かい光の中に痴呆性の眼の色のやうにぼんやりしてゐた。

佛陀寺の中を探し廻つて私は、矢張りあの本堂の石碑の前で、青年と連れの女とに出會つた。私が教へたやうに青年は手を合せ、連れの女も並んで同じ形をしてゐた。

禮拜が済んで青年は私の姿を見ると悦んだ顔色をして近寄つて來た。

「あなたでしたか。もうお目にかゝれないと思つてゐました」

それから派手な着物だが帽子とはちぐはぐな服裝をしてゐる連れの女を私に紹介した。伯林ウインター・ガルテンの下つ端の女優で半日はお裁縫に行き、夜は舞臺で稼いで喰べてゐるといふのだ。見たところ、小柄ながらがつしりしてよく働きさうな獨逸少女だった。

「どうですか、御様子は」

私は何となく遠廻しに斯んな言葉で尋ねた。

「いや、ヘッセの本はまだ買ひません。この象徴的な東洋の文字の縦に書いてある風色の石碑に向つて、あなたの教へた通り手を合せてゐると、何となく靜かな氣持ちになつて感情がスポイルされます。それで此の間からこの女にも教へてやらせてゐます。けれどもこの女は何とも無いと言ふのです。この女が私にくつついて居るうちは私の印度入りは絶望です」

彼は女を顧みて苦笑した。

青年はレストーランに残つて働き、私は彼の戀人の女優と同じ汽車で伯林へ歸つた。汽車の中で、私は彼女に訊いた。